私の履歴書

小林　真之

経済学部経済学科教授［金融経済論］
［こばやし　まさゆき］

経歴

- 1946年　●北海道妹背牛町に生まれる
- 1969年　●北海道大学経済学部卒業
- 1974年　●北海道大学大学院経済学研究科博士課程修了
- 1974年　●北海学園大学経済学部に勤務
- 1985年　●北海学園大学経済学部教授
  ～現在に至る

主な研究業績

- 『比較金融史研究』1992年、ミネルヴァ書房（共著）
- 『株式恐慌とアメリカ証券市場』1998年、北海道大学図書刊行会（単著）
- 『金融システムと信用恐慌』2000年、日本経済評論社（単著）
- 『現代の金融と地域経済』2003年、新評論（共著）
- 『現代金融論』2004年、有斐閣（共著）

■純粋“道産子”

戦争直後の生まれで、毎年夏の終戦記念日になると、“戦後…年”という報道により、自分の年齢をいやでも知るところとなります。生まれは妹背牛町。稲作地帯ですが、バレーボール全国一となった妹背牛商業高校で有名です（廃校が決まったそうですが）。中学２年まで同地で過ごす。小学校の授業は複式学級３クラスの分校でうけ、映画“24の瞳”（木下恵介監督）とそっくりの世界で過ごす。同級生に校長先生の息子さんがいたが、なにか生徒が悪さをすると、本人はなにもしていないのに校長先生が真っ先に自分の息子を「殴って」いたことが、何故か今でも強い印象として残っている。だいぶ前に懐かしさに駆られて分校を訪ねたが、建物はすでに跡形もなかった。

■二足の草鞋

中学３年から事情があり旭川に転校。この年に浅沼稲次郎社会党委員長が公開討論会の席で暴漢に刺殺される。翌日担任の先生が悲痛な表情で生徒に話をしていたことが思い出される。中学を卒業した後の進路に悩んだが、父親を早くに亡くしていたこともあり、昼間は某新聞社に勤務し、夜に定時制高校に通うことになる。この頃まだ高校進学率は50%位であったと記憶するが、中学卒業後すぐに社会に出る人は珍しいことではなかった。

４年間、社会人と生徒の“二足の草鞋”を履くことになる。定時制は１学年４クラスあり、定時制教育に骨を埋める覚悟の素晴らしい先生が多かった。そうした先生の感化ならびに勤務した新聞社は60年安保でもリベラルな論調で知られ、優秀な記者が全国から集まっていたこともあり、彼らから大きな刺激を受け、大学進学を決意する。

■“ゲルピン”時代の学生生活

北大文類に入学したわけだが、ベトナム反戦運動のデモになどがあったものの、学生時代４年間は比較的静かにすごすことになる。この頃の学生は「世界」、「中央公論」のような月刊雑誌、「朝日ジャーナル」のような週刊誌を持ち歩くのが一般的な雰囲気であり（読んでいたか否かは？）、高校時代余り勉強をしていなかった自分としてはそうした学生がまぶしくもあり、遅れじとばかり哲学書、歴史書などを乱読する日々を送る。

２年目後半からの専門課程は何故か経済学部に進む。ここで金融論ゼミを選択し、現在の研究生活に進む端緒となる。学部時代はゼミの人数が7人と少なかったが、ブロック・ゼミ、インター・ゼミなどに参加し、討論の中で他大学の学生から大きな刺激を受けている（７人の内３名が研究者の道を進んでいる）。学生時代一番つらかったことは読みたい“本”を“ゲルピン”で買えないことで、やり繰りして購入した当時の本には今でも愛着がある。そうしたなかの１冊に甘粕石介著『科学論』という書物があり、この本から論理的に思考する重要性を教わった。その当時経済学部には名物教授がおり、そうした先生から学問だけでなく、“生き方”についても多くの示唆を受けたことが、もう少し勉強しようという気持ち抱かせ、大学院に進学することになった。

■大学院時代

だが大学院に入学した年に大学紛争が激しくなり、院生研究室封鎖などその余波をこうむることになった。昭和40年恐慌は戦後最初の本格的な恐慌として知られるが、“豊富のなかの貧困”というテーマに関心をもっていたこともあり、大学院では「アメリカの銀行恐慌」というテーマを研究課題とする。当時29年大恐慌の研究が盛んに行われるようになり、そうした研究の潮流に加わることになった。専門（金融）の研究会だけでなく、“土曜研究会”という異なる専門分野の研究者が集まって行われた研究会からも大きな刺激をうけた。

■教育と研究のはざまで

第１次オイルショックの後に本学園に勤務する。まだ大学紛争の余韻が残っていたが、貨幣・金融論の講義とゼミを受け持つことになる。最初の年に講義の最後の授業が終わったとき学生から盛大な拍手を受けたときには、さすがに感激した（もちろん他の教員の講義もそうであったようである）。また２部の授業は大変緊張した思い出がある。なにせ受講生のほうが私のような“若造”よりも年配であったからである。講義に良い意味での緊張感が溢れていた時代だと思う。

研究のテーマは徐々に銀行恐慌から証券恐慌に移っていった。最初は銀行恐慌の前提として進めていたが、銀行の投資対象としての擬制資本の領域に深く入っていくことになる。両者に共通する「減資」という現象に深く興味をそそられたからである。現在は再び銀行恐慌の研究に戻り、政策論という新しい視点からこのテーマの研究を進めている。問題意識は時代状況に規定される側面が強く、同一のテーマでも異なった姿を見せるようである。この契機となったのは90年代後半からの拓銀を始めとする銀行破綻の続出という事態であった。“ミネルヴァのフクロウは夜飛び立つ”ということでしょうか。

■学生諸君に一言

私の講義では意識的に幾つかの意見を紹介して、学生自身が自分の頭でテーマについて考えるようにしてきたつもりです（本当はどこかの「教祖」のように断定的な主張をしたいところですが）。社会科学は生きている人間を対象としているので、理論を検証する自然科学のような“実験”をすることが難しい。したがって現実の問題に対する“解”は必ずしも一つとは限らないのです。主張の当否は長い歴史で検証されるのです。人の言説にすべてを委ねるのは「楽」ですが、それは「非惨な」結末を招くこともあるのです。ご注意！

研究室の窓から

格差社会とはどんな「社会」か？

犬飼　裕一　経済学部経済学科助教授（いぬかい　ゆういち）

社会とは何か？

毎年、授業で話していることですが、社会学の教師にとっていちばん難しい質問があります。それは、「社会とは何か？」という問いです。毎度毎度、急いで「それがわからないから社会学を研究しているのです」と、言い訳することにしています。私の師匠も、よく奥さんに「あんたのように社会を知らない人が社会学とは呆れるわ！」といわれるのだと、笑っていました。

この分野定番のジョークに、「社会学について詳しくなることと、社会について知ることとは別だ」というのもあります。

ただし、毎度逃げているわけにもいきません。

ゼミで「格差社会」をとりあげました

そんな時には、発想を切り替えて、具体的なテーマにしぼって考えてみるとよいでしょう。私たちが漠然ととらえている「社会」がどういうものなのか考えるヒントになります。たとえば、「格差社会」という言葉を最近よく目にします。さらに眺め回してみると、「一億総中流社会の崩壊」とか、「勝ち組」あるいは「負け組」といった表現も追加で出てきます。実は昨年のゼミナールでこの問題を取り上げ、一年間にわたって最近出たいろいろな本を読んでみました。

さすがに話題のテーマなので、たくさんの本が出ています。質も様々。長年にわたる社会調査をふまえて書いている力作もあれば、個人的な印象を書き連ねたといった本もありました。評判をとった前著のついでに書いたといった本もありました。回りくどく説得する本もあれば、大上段に構えて独断を押し通すといった著者もいました。ただし、ある程度まとめて同じテーマの本を読んでいくと、別の感想もわいてきます。

いろいろな人の、いろいろでない意見

いろいろな人がいろいろなやり方で書いているのですが、言っていることはあまりいろいろではないのですね。例えば、「格差社会」という場合、人々は肝心の「社会」、とりわけ日本社会をどんなものだと考えているのかということです。すると、少し以前の日本社会というのは、ほとんどの人々が「中流」で、誰もが働けば豊かになったり、偉くなったりできる社会であったという理解が透けて見えてきます。地方の優等生が受験戦争に勝ち抜いて中央のエリートになるといった枝葉の話もありました。本当にそうだったのか？という疑問は、あまり見当たりません。昔のことにはあまり興味がないのかもしれません。

また、当人たちがいっているのが正しいのかどうかを度外視して、どういう人たちがどういうことを主張するのか、というのを考えるようになると、また別の事情が見えてきます。

社会階層

そのものずばり社会階層はどうでしょうか。おれは格差社会の頂点だ！トップだ！選ばれた人間だ！と感じている人は、「格差社会」の本は書きませんね。当たりまえです。なにやら上空にうっとうしい連中がいて威張っていると感じるから「格差」について書きたくなるというのが人情。かといって、あまり底辺にいては、本を書いて本屋さんの店頭に平積みにすることは最初から困難です。

一般に、出版社に原稿を持ち込んで本にしてもらうのはかなり大変だからです。

世代

世代はどうでしょうか。「格差社会」を論じている本の多くが、いわゆるバブル崩壊から小泉改革にかけての時期に「格差」が生じ、「中流」が崩壊し、「勝ち組」や「負け組」が登場したのだと口をそろえます。

本の著者紹介の欄を見ると、1960年前後に生まれた著者が多いですね。バブル経済の時期以後に「大人」の仲間入りをした人々にとって、「格差」は切実な問題だったのかもしれません。そんななかで、ともかくも、そこそこに善戦してきた人々が想像できます。「勝ち組」を誇るのは照れますし、「負け組」が声を上げるには勇気がいるものだからです。

他方で、以前ならば「保守派」と呼ばれた思考様式をもつ人々が、「格差社会」の弊害について盛んに発言しているのも目を引きます。これも、以前の世代ではあまり見られなかった現象です。この場合、「一億総中流社会」というのが保守すべき過去の美風ということになるのでしょうか。時代も変わったものです。

地域特性

地域はどうでしょうか。個人的には実はこれがいちばん興味をそそる部分です。すぐに気づくのは、生まれはどこであるにせよ、ほとんどの著者たちが東京に住んでいることです。

例えば、親の家に“パラサイト”（寄生）して家賃も払わず、アルバイトでのんきに独身暮らしをしている若者を非難する議論を考えて見ましょう。この場合、著者には東京の家賃の異様な高さが身にしみていることが推測されます。地方出身者の場合は、両親が地方の大富豪といった例外を除けば、住居を自弁しなければなりません。東京の生まれでも、親の持ち家という世襲財産に恵まれなければ同じです。月の手取りの半分以上が家賃やローンで消えるといった人々にとって、東京生まれ、家付き（＝家賃・ローンゼロ）の身分はそれ自体で「格差」を象徴します。そして、「日本社会」と銘打たながら、事例はどれもこれも東京とその近郊の話ばかりなのですね。

東京が封建都市に？

ささやかな持ち家を「世襲財産」と呼ぶのは、なにやら大げさですね。ただし大げさついでに話を延長していくと、世襲財産によって「格差」ができ、やがて身分差が生じるのならば、これはもしかすると新しい封建社会の成立かもしれません。いうならば、再封建化。東京は封建都市に生まれ変わるのでしょうか。宅地の一つ一つや、マンションの敷地の分担所有権に、爵位や知行が付くようになったら面白いですね。もちろん世襲の特権には世襲の義務が伴います。本領安堵と引き換えに賦役や軍役奉仕が発生したら大変でしょう。

「社会」の再生産

冗談はさておき、こんなふうにいろいろ考えてくると、昨今大勢の人々が「格差社会」という場合の「社会」がどんなものなのかかなり見えてきます。それにしても、狭い階層の、狭い世代層による、狭い地域の「社会」です。

ただし、こういうふうに限定された「社会」がマスコミに取り上げられ、さらにたくさんの本や記事を生み出しているのは事実です。特定の形の「社会」が再生産されるわけです。

それらの「社会」が正しく現実を映しているのかどうかは別として、いろいろな本で語られる内容を、各自の実感と突き合せてみるのはよい体験でした。ゼミのメンバーの一人が、ある本を評して、「この人は自分が勝手にイメージした社会を日本中に広めようとしているんじゃないですか？」と言ったのに、はっとしたのを覚えています。

econ.［エコン］No.15
発行:北海学園大学経済学部　2006・冬

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL.011-841-1161（代表）FAX.011-824-7729
HP.http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/econ/
e-mail:admin-ec@econ.hokkai-s-u.ac.jp

econ.
経済学がもっと面白くなる情報&メッセージ!
北海学園大学
経済学部
2006
エコンNo.15

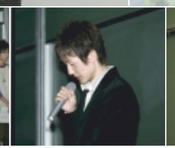
地域研修報告会

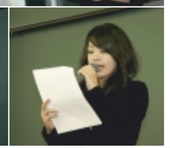
地域研修報告会は「地域研修」を履修した学生が研究成果を発表する場です。この「地域研修」では、2年生からはじまる専門ゼミナール（教員と少人数の学生が共同研究を進める授業）が主体になって北海道内外の各地を訪れ、地域の産業や生活やまちづくり等の現場の動向を学びます。この科目は、通常の学内での勉学だけではなく、現地での体験・調査・交流を融合させたとてもユニークな科目です。「地域研修」を行うゼミの多くは、事前学習を重ねた上で夏休み中に目的の地域で滞在しながら研修し、夏休み後に研修成果を取りまとめ、その結果をこの地域研修報告会で発表します。

2006年度の地域研修報告会は2006年11月25日と12月2日の2日間にわたって開催され、16のグループが発表しました。以下に写真で、報告会の様子を紹介します。

●11月25日(土)
1. 太田原ゼミ：旭川市・芦別市
2. 川村ゼミ：夕張市
3. 北倉ゼミ：長沼町
4. 西村ゼミ：苫小牧
5. 水野ゼミ：韓国
6. 水野谷ゼミ：西興部村・枝幸町
7. 高原ゼミ：ニセコ町
8. 山田ゼミ：函館市

●12月2日(土)
1. 浅妻ゼミ：福岡市・長崎市
2. 池田ゼミ：函館市
3. 奥田ゼミ：余市町
4. 小田ゼミ：倶知安町
5. 竹田ゼミ：石狩市
6. 古林ゼミ：苫小牧市
7. 山田ゼミ：金沢市
8. 古林ゼミ：日高支庁管内





メキシコの国際送金をテーマとした研究 人の顔や生活が見えてくる経済を追求したい

酒井邦子さん | 経済学研究科 経済政策専攻博士（後期）課程3年

酒井さんとラテンアメリカとの深い関わり

酒井さんは、多彩な経歴を持つ。看護学校を卒業後、東京での病院勤務時代に、日本とメキシコの交換留学生に参加。約1年間、メキシコの小児病院を基盤に保健所や孤児院など子どもを中心とした施設を精力的に回った。1977年のことだった。「当時、看護師を続けていていろいろ行き詰まることがあり、何か、思い切って行動したかった」というのが、行動を起こした理由だ。そしてこのメキシコ経験が、後の酒井さんに大きな影響を与えた。帰国後も看護師を続け、30代で北海道へ。数年後、「ラテンアメリカの研究がしたい」という思いで、北海学園大学経済学部2部へ入学。酒井さんの経済学探究の道が、始まった。学部4年間の修了後学部の研究生として1年間を過ごし、大学院修士課程に進学。在学中に2年間休学し、JICAの派遣で今度は南米のパラグアイへ。現地で暮らす日本移住者の福祉や健康管理などの調査が主な仕事だったが、この間、障害を持つ子どもたちのためにNGOを立ち上げ、施設の基盤づくりに奔走。この施設は、その後、政府に認められ、現在は障害者の学校になっているという。修士論文のテーマは「メキシコの債務問題」。修士を4年間で卒業後、大学院研究生として1年、そして現在の博士課程へと進み現在に至る。経歴の多さは、酒井さんが歩んで来た道のりの濃さでもある。

◆一週間の平均的なスケジュール

	AM～PM	1講目	2講目
月	職　場	研　究	金融政策 特殊研究演習
火			
水			
木			
金		La clase de español	
土		研　究	

人々の暮らしがリアルに見えてくるような論文を書きたい

留学時の体験をふまえて酒井さんが博士課程でテーマとして取り組んでいるのが、「NAFTA」のメキシコ経済への波及を、金融の側面から明確にすること。NAFTAとは、'94年に発効したアメリカ、カナダ、メキシコの3国間で結ばれた自由貿易協定で、域内の貿易は拡大しているが、酒井さんの目からは、メキシコの貧富の格差はどんどんひどくなって見えるという。「アメリカで働いているメキシコ人の約8割が自国では食べて行けない不法移民だといわれます。そして彼らが本国へ送る送金の総計額は、メキシコの原油輸出額にも匹敵するというデータもあります。これらは、あまり表に出てこない数字ですが、こんなに大きな経済を見落としてはいけない。本当であれば、それが暮らしの実態を表すリアルな経済なのではと思います。学術的なものにするためには、それを突き止め数量的にも実証しなくてはならない。資料に乏しく、大変な研究ですが、やりがいもあります。現地を訪れ、悲惨な状況に出会うたびに、政治や経済のゆがみが国民の暮らしに大きく影響することを実感します。そんな人たちの暮らしや顔が見えてくる論文にしたいと思います」。

大学と病院、その切り替えがリフレッシュにも

現在でも、看護師という仕事を持ちながら大学院に通う酒井さんだが、学問・研究は、ライフワークのようになっている。日常は、9時から5時までが病院勤務。その後、6時頃に大学へ訪れ9時頃まで、自分の研究室で論文の作成や資料集めなどに没頭する。時には、担当の小林教授と、熱いディスカッションをかわすこともある。「もう15年以上もこのサイクルを続けています。看護師という仕事も、大学での研究も、私にとってはどれも大切。その切り替えが、リフレッシュになっていることもありますね。個々の職業の専門性を深める研究も、職業を離れたこだわりの学術的追求も、意義のある大きな学びであると確信しています。職種の違う院生や先生とのコミュニケーションも有意義で楽しく、私にとって大学院は、居心地のいい環境といえます。このような勉学の場をいただけたことに感謝してます」。

特集 いま、大学院でできること。

大学院は、学術の理論及び応用を研究し、その深奥をきわめ、または高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的する教育機関。
本学の経済研究科には、現在、修士課程、博士課程合わせて18名の院生が在籍し、各自のテーマを探求しています。
大学院とは、どんな所なのか、どんなテーマを研究しているのかリポートします。

医療の分野を体験しながら経済学を探求する

鍋谷健彦さん | 経済学研究科 経済政策専攻修士課程1年

社会の仕組みを知るためにも経済学は不可欠

鍋谷さんは、福祉学部の出身。卒業後、大学での専門性を生かし、ソーシャルワーカーとして病院に勤務した。ソーシャルワーカーとは、広い意味で、社会福祉学を基に社会福祉援助技術を用いて、社会的に支援を必要とする人とその環境に働きかける専門職とされるが、具体的な仕事の内容は、赴任先によってさまざま。大病院に勤める鍋谷さんは、患者さんやその家族からのさまざまな相談を受け、可能な限り解決をしていく立場にある。「相談の内容は、経済的なものであったり、心理的なものであったり、実にさまざまです。世の中の仕組みや機構を知るためにも、経済を知らなければならないと痛感し、独学で経済学に取り組みました。しかしそれにも限界を感じ、本格的に取り組みたいと大学院進学を決意しました」。

入学以前のイメージより はるかに快適な研究環境

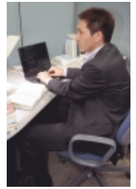
大学院進学に際して鍋谷さんが希望したのは、医療経済学が研究できるところ。いろいろ調べた結果、現在の勤務条件を変えずに通学が可能な大学には、その分野は設置されていないことが分かった。「それであれば福祉や医療分野は自分で本を読んだり、現場で学習したりし、経済について大学院で研究し、それを融合させようという考えに至りました。通学の便も考慮し、ここの研究科を選びました。その旨を担当の教授にお話ししたところ、公共経済や市場原理など、研究したいテーマと関係のある講義を組んでいただいたり、福祉系のテキストを用意していただくなど、入学以前に描いていたイメージより研究環境がいいと満足しています」

◆一週間の平均的なスケジュール

	AM～PM	1講目	2講目
月	職　場	講　義	研　究
火		講　義	研　究
水		講　義	ゼ　ミ
木		講　義	講　義
金		講　義	研　究
土		休　み	休　み

一日4時間睡眠が 大学院ライフのスタンダード

鍋谷さんは今、大学院で研究するにあたり、一日の時間を十二分に活用している。9時から5時までが病院での勤務で、その後、大学の研究室へ。講義やゼミ、研究などで、10時頃まで大学で過ごし、帰宅後は12時に就寝。ここまでは割と普通だが、なんと午前4時にはもう起床。出勤の7時までを、英語の習得や読書にあてている。一日4時間睡眠が、鍋谷さんのスタンダードだ。「私の場合、社会人になって、社会を知って、もっと知りたいことがたくさん出て来た。だから今はものすごく充実しているし、大学へ来る喜びがあります」。将来的には、博士課程へ進み、さらに研究職へ就きたいというのが鍋谷さんの希望。その意志の強さは、必ずそれを実現させるにちがいない。



ロシア語弁論大会 出場についての 報告と感想

経済学部4年
太田　浩輔

日本ユーラシア協会北海道連合会主催で40年近い伝統を有し、北海道全体を代表する「第38回全道ロシア語弁論大会」が、去る11月18日に開かれた。審査員は北海道大学、北海学園大学、札幌大学、ノボシビルスク総合大学などの6名で、日本人3名、ロシア人3名であった。永年、ロシア語学科のある札幌大学の学生が上位を占めていたが、近年になって北海学園大学からの入賞者が増えてきている。今回も上級のAクラス（5分間のスピーチ・詩の朗読、ロシア人審査員との質疑応答）と入門のBクラス（3分間のスピーチのみ）それぞれ2名がわが大学から出場した。全体の出場者は16名であった。結果はBクラスでは1名の入賞者、Aクラスではなんと優勝と準優勝を北海学園大学勢が占めることができた。準優勝者は「親族会」というテーマでスピーチを行なった本学人文学部4年の石井美奈子さんであった。珍しいテーマ故、今大会で最も注目されたスピーチであったと思う。そして今回、幸運にも1位につくことができたのが自分である。スピーチのテーマは「ロシア留学中に出会った人々」であった。私は2年間、ロシアのウラジーミルという町に語学留学をしていたのだが、その時の体験と留学中に出会った人との触れ合いが主たる内容であった。他の出場者のスピーチとの差別化をする目的でロシア人やロシアをよく知る人にしかわからないようなジョークを織り交ぜるなどして自分なりのスピーチを作ることができた。

練習時は優勝できるとは思っていなかった。ロシア人との会話ならば何時間でも話せるが、5分間といえどもスピーチとなると話が違う。話の途中で忘れてしまう。本学のロシア人教師であるヘインズ先生の助けをお借りして練習したが、本番のその時まで100パーセント実力が発揮できるかわからなかった。だが、当日は自分が最後の順番ということで緊張はしなかったことも幸いして、大きな失敗もなく、めでたく優勝できた。

出場人数の少なかった今大会とはいえ、優勝できたことは大変嬉しいことであった。自分一人の力ではなく、留学を支えてくれた両親、友人、そしてロシア語学習のきっかけを作ってくれた先生がた等の多くの人の助けがあっての優勝であるので、それらの方々に感謝の言葉を述べたい。

Спасибо!（ロシア語で「ありがとう」）